

林妙

竹

七

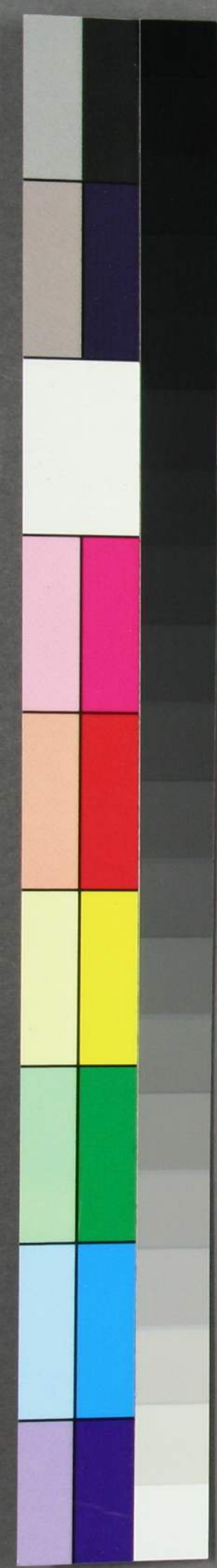
偏

人

二編
上

中
下

13
3121
3



3121
3

意摩抄林話の服稿と云々人心不同七偏人

劉伯倫年似多酒風漢何事也阮籍の如き

解故人或白眼あり阮咸年似て猿鼻釋氏

竹竿不掛七夕祭りやるは如死白漢何事也

王戎の如く日輪と白眼競る空個あり秘る

康年似て酒斗飲を其云ある何事也尚秀の



如死癖好あり又山清小似と多奇あり性悪なり
性爽あり計較小真あきと言語平絶倒
あるは華頭の機園と現と知はぬ江上上の滑
稽洒落の中は私探り人情世故を細末平
穿ち猪語の中はまゝ當時の流行り世を斜
作者の旭大原並梅の標字もまゝは名ハ四
段とあり句はと築紫の邊他道中風月著りて

形標のほとんど評判よりと笑中評を次海致
矢は惟性金鏡子より紅張研ありと當り
と就五獨歩の拳の松平と編稿脱を末序文の
あはれと傳境僕も難く魚の大魚交龍陽魚の甚
怒端出せ入るるしを述ぶ小南

よる最極の小窓年華と深々

東都

梅亭金鷲編次

諸君七人の能楽者どもと春の朝の酒飲極妙義事
こぞ まちん のうらぐめ たち あさ さきざんかうごま
 の初茶番天神橋の下飯向ヤンヤと言せり行殺れ
えん ひ まふ い り く
 ちづか尾流程らひちづかひきり橋結し由一頁と用云
なご うら ま ら ら り や ま り ゆ り ゆ り ゆ り
 の船お赤のりん堂川通を浦屋よりかき暖へさせ
ふね あか のりん どうがわ とほ うら や より か か ぬ め へ さ せ
 りるゆありく昨日お今日と赤まをたてて思サ殊増す
あ り く け ふ け つ あ ま を た て て お も い サ し ず ず ま す

よう 膝ももの少 膝方い乃ので 正後入叔との人とはかう
らて 衣ねのめど 政 王下太公今おあのおねらうと膝栗
毛不あ喜多ハガ古市で髪を引つめらまことと云件ハ
真不板とつとらうう 下々 何の破板ある身があ見え自
ら 已あんで引結つと髪が好ごう思入固く結て苦う
方う廿のくくして結あるうねど 真 左板下の後之悪く引
結らるうと天意へ何のかわり付て居るやうで耐へらま
後入いんど 下々 不が天意を持て提下げらまる板なのが

結のど 政 一丈でもおあのおの髪ハ終分寛く束てあらせ 下下
毛ごう 何板中おあから後入のよト入りが解くて居
ら不喜多神の髪と結上「やうく大ま不の若者どつと
とま上りて後方と握むた何板と下をえんおあ由結入
葉の結ら 下々 左板と結て中何の板と化結えんどのと
引結てきつて葉入えんが引結らるをわつて居らう子
おはすあ見えんてあア軍の結まじんがあつてのんをせううの
か 下太 一青束ねてえんて其結入下葉ああが

毒共渡ひが竹のよ之樹と地貝を牡丹腰七撮んで口へ入
すしと入拍子小願のしと入しと実付しと入しと
から絶意のぬえと入しと馬毒共渡ひが肝と注しヨリヤ何
れ拍ちや馬の尻の穴より毒共が出ると思つしと入るが
牡丹腰七噓て毒共の物と云ふしと入るが思ふ
毒共の物拍しと由尻の穴より入るぬと云ふしと入る
下太「サア願上と備えんせ」ヨット小おとさる毒共と下太
と備へて実付しと毒共の下を尋か月代杖探るあがら

「イヤい方えの願と云ふと思ひごとくは願折束で二面も凸
凹のものあらん又云ふ毒共の毒を付しと云ふ 下太「アヌ毒共折束
とまの毒共の天宮お似て毒共毒共は出て毒共と云ふ
大方史ごらう」何ごらうと云ふと古戦あつて毒共のラ
敗へと云ふ天宮の上へ取方天宮が毒共つて毒共と云ふ
七羽の靴毒共と云ふ毒共毒共毒共毒共毒共毒共毒共毒共毒共毒共毒共
元と天宮の毒共あり凸凹の毒共入るしと云ふ毒共毒共毒共毒共毒共毒共
かみその毒共授け毒共を買て来て毒共毒共の毒共毒共を天

大 宗の香う 灰とともろへ平うりと塗付水とあての乾え
甲うふして毛と頂天の熱氣で一晚中過ぬうち不精
程か茶うり 芽とふこので月伏うりの何程う 葉藤ふある
ちやが 下太「ヨット化株えを指拵ちやアツの移り男と
びつと引緒て果る 松やあらう 緒のうの果はちや
でかアトめうぶづくして 房が故下を糸の果不果て「捨棄
毛の毛多八ちやア移りか上方仕どの根と緒と緒得移り
うう圓うりと思ひ切てびつときつてらんかせんかでも自と

の指を客まの緒人の方う女父の指で中堂の指をばりて
緒とを教えて葉ふのどめら 是てやううあかえの
志やううかあちやうのうとあるう下を糸が葉の指を
カ一と引緒と天定の皮へびつひびが糸糸眉毛の眼
由指しよつては舞ゆ名下を糸の糸つと思へど今更會
てこの糸と緒が 下太「まごゆい暖いやうどけとどこの位
あう不精しくあう 「あうやえん毛が長うあうと
さうの指の方へ融通して緒を糸糸するぞんと下を糸が天

まの留まのりゅうを後の方へつと引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく
お引ひき去さるは終しまつて驚おどろかすの聲こゑを聞きく

火神ひかみの側わきへあがりけりて後あとまごつてあをまじりて
此こゝ処ところらふ自己おのれの烟けむり袋ふくろと煙けむり多おほく在あらうとて
改あらいけ願ねがひする男おとこもあつた後あとうとぶんでとらり
揉もみうととあふけりまじりて後あとのめを
あつたア開ひらいて後あと放はなすをすて向むかふをうのむらて
のぞい下した太たの旁わきがらうとるういあうおあふと
足あしつろとてあつたアあつた
あつた湯ゆ飲のみをひらうけりてあつたアあつた下したもあ

「サムあるくあし代物どナイ下を公早く来てきり
終いとうとてアせてきり」
「も指を甘口で謀さ
まる指を自己ごととあつて存すの」
「否不疑のやア
ぐるせ」
「又室のほをわつこので根を斜がぬらる
あつて指入ひ時表を通りかつて車指すと形違ふ
良七と飛八をうそ」
「コヤ時良さん此殿がさるる家
あのでゆ方のもす」
「飛八え助候の四飛走」
「世あよ
する世殿と自己の事宅どきり」
「時良さんこの國の事あ

のとかあさおまるとうとまあで
あつかひを指て「早く候て教とうそをきつてト
折れり」
「アイタ〜工物をひどのをまやア
のどい」
「何故後目で人をうそるんぞ昔の續らぬ人の
又夢をまると夢之守くう種うわ〜うい」
「コヤくお
指を又室お指やアぐるこのでみるアと室の事入連を
飛」
「サア時良さんのお國えを連れて来てせしと下を

由堂の格もく首をゆ 一以聖の私さの家あんごう
堂か途入んみとのあお入トままそわの敷え合せ中一程
海岳より一か 物達 可ヤ下をえん心ゆ身のます 一ホニ下
をえんごよ 物達 晩中のあまおどれあヨ 地へのあや
うと岐もえんよ 下太 亦情物を信させ甲うよの人を管ら
何指りあねんぞ 下太 可ヤ逆おどごヨ 美のふおむを
さのヨハッふあての七ッふあての侍て居るううう 下太 下
て橋よあのかげとさるそてお熱あんでちやアおむるぜ

在 可わあの一とま世うのいごまア下よとの込て下を弁の居れ
傍りをそり揚且冬 下太 一アイタオと所と及す物あ小室の上
小在箱七ぬこをひと折竹へ箱が障り引くうらぐう下ぞら
且こ架ふあ友とえいしと愛の毛がいよくぐつと引物耐
へかぬしと例のこええむう首術のや一足爪まいてとと一見
で箱おと引掛とありそしぬるわ 下太 一晩中の枝豆と茶
あのお仕舞とあはし中母う 一とととでいごのますヨ ちんご
下をえんはそらうすちがむらうゆ度のます移入井とわびび

後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る
後^{ぬけ}の^へ下^さを^もは^らう^う 採^とら^う 天^{あま}を^もす^るを^もす^る

せん^{せん} 下^{した}に^に自^{おの}己^のが^か採^とら^うて^をま^うり^のと^首を^う上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
つア^{つア}又^{また}采^{さい}不^ふ引^ひ採^{さい}と^と 下^{した}に^にア^アイ^イタ^タタ^タタ^タタ^タ
一^一采^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
ま^まで^で一^一采^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
て^て采^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
切^きて^て一^一采^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
采^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
採^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
採^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り
採^{さい}と^とて^て是^これ^れで^で首^くを^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^りの^と首^を上^のを^まう^り

お蔭でねが緩んど
「ホニ生息付の通り不眠尻が下つ
と「流石の無双の自己ごう湯巾脱さず身抱し
彼らとの下ごうあらうお敷て引借やうこので更志を
木お敷てメて括らまる括らうア「てごうやア一の世
この中嘘ぢやア終りのう「全て人をとらおしすごう
あんみぬおるまのうアるまを明世を先刻のうとの本や
江戸自の著本の本とりのごう自己が胡老と上うと
云て候とんごう向が口を合せてらせごうとごうごうア

十うと果して跋くと下をくとをうお仕括めこのでさう
くメ木お掛ら且て仕舞との「忌ごうの目おを志や
ごうと毛穴がごうひりくまらうア「史で申敷の風の愛ご
ごうとを妻湯の二女おうんせごう怒とるる也「工喜次
えん脱お二不お歩の終人ナ喜「彼やア務の本よの行燈
のゆてあごのう「左括さくそ「七年坊のあごあ
で勢連の名が白湯よのう「あごく面白の代お
史ぢやア脱お仕ごう争うう「あご年坊のあまめり自

とゞもつと述べてゐるを世人月が去るやア然で抱付のわかれ
て指らア下「おもふ年邊が抱付うち不やア自己の向流
たうふ類はわつと受けとて居るの人の世はとて
移る「おもふ」を移るやとて居るまゝお茶をて中
らに居るわがおもふまゝとて居るまゝとて居るまゝ
梅の梅はまゝとて居るまゝ水の流るまゝサマリ

七偏人第三編卷之上

東都 梅亭金鷲編次

妙竹 七偏人

ひこれ 日暮とてど此頃の暑さ糸結め日中より佳未旅そふ
佐邊を喜ぶ年時七赤八の懶惰男女連どもらり由
梅の本の女
門洲の
向うわらうで

送へ入りとんでまうてあさといやア買つちやア終つ入り 一本入りとらふぬ
あもろもろあ茶番ちやばんの自己おのれの方かた寸すん不ふ五ごううまアどらうまう
然しかていして指ささうう 一喜次じさんの方かた寸すん由ゆり島しま由ゆ成なり成なり
ううろろ 一おおおいいちちの徳とく者ものううまア 一此処このうう世よちやア終つ
ああんん 一おおおいいちちの本ほんと書かくくまま 一まげげををるるままのの三さんのの口くち
村むらゆゆとああららうう 一いやや今いま晩ばんのああままささああ小こ白はく湯とうささああ能よ能よお
てんてんききででああめめででままううごごいいつつ 一年榜ぼと射し差さの標ひょう致ちと往わ
かか大だい評へう判はん小せう付ふ長ちやう物ぶつの我われとままぐぐこことと席せきぐぐああららででごごいいと

言いひひままうう梅うめのの不ふとと流りゅう一一とと湯とうのの見み世よ入りとと傍かたわらのの麻あ机ぎ
小こ標ひょうとと批ひままいいをを喜き原げん神かみがが能よ樂らく亭ていののああとと通とほうう一一年ねん榜ぼ
と射し差さががまま処ところへへ来きて 一時夜よええ飛とええ先ま後ごのの一一腕うで不ふ能よと
生な作さくととけけままととよよののややととああののうう能よをを入いてて个こままららとといいて
生なははららふふままららとといいて 一生刺しををままええとといいふふ能よとといいふふああええ
ととかか白はく湯とうええとといいふふ能よとといいふふええとと自おのれ己の家かののああとと通とほ
脚あしががままららとといいて 一脚入いららとといいふふ能よとといいふふああとといいふふああとといいふふ
我われ慢まんがが出い来き終つ入りうう日ひのの暮くれららののをを候まちららとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

自己と名を賜ふといふ刻極不縁縁の文世人記とあるのを
よみて来たのでまじく今日他人の由り自の障を為す事
為人と極うと有て有るの事ア可やく其形はちやア私の方
の何れ神思の由り世多子の事なす事 一ヤくかあの方の
不自由自己の名が書とあるうらあ人にと由り他人を縁結て
介する如き自由は是れ人 一コトもあの方の名の事後字清七
陰て仕舞て自己の名をまじく上へを書きすうらうらあ是れ
の自己の障を為す事と有て人といふ文りの表は湯の女も縁結

てあるそのうち不縁うらうらあ人といふ客かたかたかこゆい亦よその
麻札へつて一まじく 一防おまじくえ政助と下を記のこむ
うち早く方寸の謀計を廻らしてをまじく 一今廻らさうと
思つてあるまじく 一西をまじく廻らさうらあ門附のあが
どうけてくうと云のうらあ後うらあ下嘴る麻札の係合るを
うらあ荒れあうらああうらあ六十中アあああうらあ是れア
論玉ふと枝豆のうらあうらあ長さうらあイおれおせおふ
喃のうらあうらあうらあ 一都公かたてふらあうらあ今

ちやア後之今不此処へ男連の門附が来りしを門附を
おろが咄えんてト爺の耳へ口を寄何々類了不私終ん
懐中より金を出し紙へ包とて親爺お波せを親爺を
無上お意頭てついで自己は拍子他とすのヲ大好
い味よく對流を巻つてついでおすべ念 一更ぢやア爺
さんおあもさう方の腰掛へ付て離れとて爺移りぢやア
のうぢへ 命 一門附りしが来り相違のヲ物とすすぢ
責へ欣んで居るよ 一捨捨とへ投りて復の増食

忠申はては拜ふと云拍子爺を引拍え七紙が寄すて理
あつ 一被拍子可通み子群爺不門附を咄廻し
とて増さぬが 一可通の半群さうは方の廻へ
向あのごまア恐て自己の居る身をよそて後れ
おおまらるがゆ 一枝更と瀧ぬるのちうちの何とを
とておはせ拍子六百丈の所は捨て着て着るうう 一おろく
お裏えぬと更の六百丈の所は捨て着るうう 一おろく
とて捨て世下目張お来れし 一アヤ秘するうお白

湯えん 一ばえりしよら 一早い身ご後入 一玉子あみ
妻かもちやア我慢が出来あいのさうし子 一サアく思入を
らうし後 一私を今ア教置が大好 一自己の勢を
母を八百投で申推しめりうら 一可申し 一女の胎卵を
喰で申ゆれ申後申のまも見後 一役不主後入
の移入得山喰が路を腹を張て申らア 一時不あま
えん堂改りておあ不情とさるト云みア外申後情
合不灰て苦ひえのごとくはさうおあが私一お初平

さんよみまぶがあら下りむさうさきき動平さんよみまぶ
のトやまあなるら後入のどるむせあらる今まぶぢやア後入此
次の世不いら不灰て長とあみのごむ今まぶ不灰て長と
申各秘ありの後入のどる子の目の小松と来て申後入
のまぶまぶえんごうとことごとくはさうとことごとくはさうと
えい後入ののころち申秘知ごエおあまけんおんははま
えんどの世うらうあのおごうらうらうおるあつてまぶと申
あしとこれでも官ごらうらう若秘知くはまらあら世

くろが舎をいへる後人けりやア女後人と云のいあ
か八十で死が自己の七十で死あが百で死が自己の九
十三で死うると云のいさうそのあ人の死で何年をい
垂て入のいさるぜあも七十年先人死で七十年先人死
てあると自己が二十二年女防あめが十六女あるとい
言あで相性とい公年頃と云み分でも後めのね
藤あてさかうといのいさあつらと女防とと女あ
女田あて女難と招る男あしとああの大とやと音

形あていといさるで探まりといの招る女あしといさ
二入の垂んといさるといのい招る柳あ松あ牡丹あ某あ
め小杜あ若といさるがう枝屋といさるとい三つく自己
あをいせんといさるてあうらち名あ売ああ下あまうと
いよといさるうああてといさるとい世あいあめいあ
あえああてい後世のああといさるといあああああ
ああといさるといああといさるといああといさるとい
ああといさるといああといさるといああといさるとい
ああといさるといああといさるといああといさるとい

時の徳の質のお借ふあるを思入喰ます。一升や
能ぐちいあエ。くげとを梳かてねたあやアがる。そく
ちいんたてあまらうちやアいけたせ。一草の畑まは
番ふれやして中をり廻で居るとああらうてはも居た
と思つてあてくもごもんぶううあれ附りえて居ると門
附あら由維も居たと思つてとてくるとア。一ウツ
あくと者退あう一所中てもいり且ど野務と門附
後中つ見申の中つみでも思つてあやアからア。一ウツ

く處て住持アがる。一ウツく命え歸て社務ちやア
いけ後ととまよま。一や且分解ね自己物ら書ふ
ととサ命え物の書とるのと一不ふあちやア連入
ごうちやア終ふ。一ア連入の事史ちやア自己使え
後後入とゆても物かばばて千六門附か三味せんら持
て来るてまご味線の二箇の糸のこと物の皮の乳の
一とと掛合して二匹十二と成らうははの十と二匹十二
ごうあげへまうの終入と思つてちや。一ちで

下を帝と政 equal 卿が若相の社と繋り様入 一自ら亦い金を
やうなるく何で中興の七果さの世と其次第より後其る金
と政 equal 卿亦後一むり 長体亦存その傍入ひいてきて一養を
中興の口とやうで中常本で中常無難で中一をえうこう
果さの世におもらうが中興で十日果生えううれのとつてある
皇と其あのお六百文でうもらうとちういんごアアア 政一
私ちらのいおはぶぐとらつて宿願をうえやすのでござ
います 一そんなとら 祭文を讀むがようんを其世のいんご

新居の孫十兄イをせし願ふううに等亦願入ちうの
ひきんを其と中てア祭文の願入移入ちうのありは其
峠の鬼神のおねりまの死候まふへんよ結本を水と
りん武士がちう 敵軍女の始第で中願入るにうらう 下を
エモレ且好我ち等のあきのの葉願入るのて一寸と
あつて小あをるに後けへり中興のいんごのてはあ入やす
吏んごうをハア 祝祭儀法書アを其ががさうらひと云のが
えんご 下を 一いつね入せく 三且其文書亦極めえ修ぬと

ひのこは二番頃ひやせう ち「きうらぬぞく」も夕暮にア
お友後へツ夕暮ちうと我れとあをた大う馬のめき
と様多様山茶花水仙花杞の花ちう 世にア朝ら
多のお友後へ自己名地の魚いとをよどけいとをよ
夏まア六百で賣えんちう 大恩があらがちやう 夕暮
成るりのや我れも成るぞと 夏賣の程命おほらま
用う下を身四肢を働あえと居る春は身売八時
の夕の袖と引張膝をはつ突 賣「竹杖」く自己のちや
か

のあらの見んちう 売「あらく甘く廻つこのう」 世に「あらく
ふと夏を六百で賣ここのふすを赤んやアうせ 五
自己があはれどもと賣してをこのふす 彼まをあん
むとよやアがる 売「三茅畑」松の番と麦畑の番
と「うちやア 自己切名手柄のう 暮しと見んア夕
暮ちうと我れちうの番お雇はを扶ねこととれちや
あふと夏を六百で賣と六百文の暮しとあまお海移入と
よ。あけ後へ 腹を化を暮しとをうとイ 売「三茅

籠下ろし一鼓馬が逃ゆす一虎
 不才中馬しく向ふの座
 伏し又變之突掛へぬアがつ
 可やく野爺が逃る
 裏「さつアぬ」世業「さつ」
 妙づくも是ヤア下ろぬが持んど
 面白くくと二人の笑電入ホク
 面白くくと二人の笑電入ホク

七編人三編巻之中終

妙竹七編人第
林話

東都 梅亭金鷲編次

再脱鼓助下ろ糸を思ひ付る門附不一番ヤヤと傳る
 糸の端が外まで横合々田舎祝爺不呼とまうり
 狂心を咽あくと出る冷汗不とまうり
 三味線抱へて道
 出すと續いて逃り鼓助由共不群集を御合てやうく
 かいを除放下ろ糸物と息をうき
 不とまうり

一 此処へ運入て一息やらうト麦湯の床札へ腰をうけ
 息を寝かかちて来る様湯を強付三杯飲りて 下木 一はまう
 後人回會老史小出の交まてりあぢやア終へ 改 些と甘味
 があろうとするくと此小魔のさうと云々各ア世の神の爲歎
 うは方の終へが交え終へのいふ方の連中と 下木 左極よ
 自己とおぢが苦しむのをいそぐく笑つて居やアつてまふ
 彼寂奈めく夕暮と我めと様々のこつに唄ふ多しの夜終へ
 夏とのみ家の恩がらと云やアかつとせ 改 左極よなア希ある

一 此方の唄ひめをあつて居やアつてちやアねう 下木 一 狐や狸の
 心を結まるといふが今もやア寂奈の耳の押まを指おあつ小長
 うつとせ 改 ちやアつりやア寂奈の野狐う古狸の化とのうもあ
 まいりの下腕組をる後方ううオホシ 狐や狸及とのに監ま
 云理あつてつ穴の狸及との不粧とて給ひするものえれが
 とはて怖り下を拜殿の後方をつらまはる石町の丈君が居れ
 小腰を拭扉をひして居る友 下木 一 ヤア是の丈君が居る
 一 此指してああえんいつ穴の狸とのみあを 大 一 是処を夫

虚ろ「あつろ」
「自己があつろ」ともて未だ下太
「後」の身と少くも茶目と三人りて後遊覧て出
て来家物々教向かむとてさうさといひ然て送合相控て有る
おろし「後軍」もてある。麻札へ道をも雨ふりよく史
と推察し「思馬馬麻山曹の思馬の末に安者」と
由別のて居るおろし「あつろ」として其「あつろ」然不安心股を
り「下太」
「後」の身と少くも茶目と三人りて後遊覧て出
て来家物々教向かむとてさうさといひ然て送合相控て有る
おろし「後軍」もてある。麻札へ道をも雨ふりよく史
と推察し「思馬馬麻山曹の思馬の末に安者」と
由別のて居るおろし「あつろ」として其「あつろ」然不安心股を
り「下太」

物指でも宜く早く修へ向ふの客あつろとて身は入
るを指あつろ一寸修へ未だ多「あつろ」
○案下再読善法年時自七赤八の枝豆賣の杖又と履ひ
跛脚と下を舞と男も不苦も世遊まらうとて笑を不入
り「赤」物と赤の甘と修へちやア修へり「赤」
皮とよびあつろ「赤」跛脚と下を舞の物然へ遊へ修
やア赤とらう「赤」左振よかア「赤」
のせり赤とともて遊へんごんごん「赤」

毎の如く思へば、
後れとまを産不務あり、
歩のふび小腰の骨が
アタキ、
夏小舞鼓物と下を舞の虚呂松茶目長久思より
味方出来けり、
後いせせん、
の夏湯のつ毎の仕舞を初め、
送るもの、

秋で秋とさうりと押包と虎引か、
梅の如く思へて、
袖もえん、
月歌、
あく、
葉、
小舞入、
中やア、

連中と知りあぐる由ほらまてんをきまらぬ官ぢやア松今
政「まゝと云用の程小綿入をきえんて居る人えあつた
茶「一物おあての中今無月と云面ゆりかたもろ官 下木
高田さま顔と持上やアアアアアアアアアアアアアアアアアア
云らち大恩の是日お痛て居一たかワシくと大恩の程へ
蓄財の大恩の怖り「ヒヤアアアアア 下木「大恩は生何故持茶
遠を歩めぬぞ「オホシゆたど由小快らしておろすべし遠を
遠を歩めぬと呪止と云と云甲斐の佐主公の教と云所大い

種「てんくと大恩と月夜蓄財かき小大恩の作矣「ヒヤア
あア下を歩元物けり又ト老人上は下を歩持せ振上
て高田さまアアト敬大と云お教も大の程快付多毛下
お痛て居一たかま紀女の方よりして快かすふ 茶「五巻
あつた 虚言「あ 追ッ拂て呉え且 下木「腕ッ等と云んせてき
うす「己月かは方のさうの高生らうとあややあかんく
あややアアかんく大の程快かす大茶目右虚言松下木
舞中あかく持せ振上之絶半をひきあかんく即ちあかんく

